

自己点検・評価 様式(平成29年度実施)

大学名 昭和大学

研究科・専攻名 薬学研究科 薬学専攻

○ 入学者数、在籍者数、退学者・修了者数

※入学のコースを別に設けている大学は、コース別に記載すること。

※既退学者数及び既修了者(学位取得者)数については、平成29年4月末までの数を記載すること。

・平成24年度入学者

入学者数: 8名(定員 8名)

内訳:6年制薬学部卒業生 2名(内社会人 2名)

4年制薬学部卒業生 6名(内社会人 6名)

薬学部以外の卒業生 0名(内社会人 0名)

在籍者数(平成29年5月1日現在): 1名

既退学者数: 1名

既修了者(学位取得者)数: 6名

・平成25年度入学者

入学者数: 7名(定員 8名)

内訳:6年制薬学部卒業生 3名(内社会人 2名)

4年制薬学部卒業生 3名(内社会人 3名)

薬学部以外の卒業生 1名(内社会人 0名)

在籍者数(平成29年5月1日現在): 2名

既退学者数: 2名

既修了者(学位取得者)数: 3名

・平成26年度入学者

入学者数: 14名(定員 8名)

内訳:6年制薬学部卒業生 4名(内社会人 4名)

4年制薬学部卒業生 10名(内社会人 10名)

薬学部以外の卒業生 0名(内社会人 0名)

在籍者数(平成29年5月1日現在): 13名

既退学者数: 1名

・平成27年度入学者

入学者数: 12名(定員 8名)

内訳:6年制薬学部卒業生 8名(内社会人 8名)

4年制薬学部卒業生 4名(内社会人 4名)

薬学部以外の卒業生 0名(内社会人 0名)

在籍者数(平成29年5月1日現在): 12名

既退学者数: 0名

・平成28年度入学者

入学者数： 14名(定員 8名)

内訳:6年制薬学部卒業生 9名(内社会人 5名)

4年制薬学部卒業生 4名(内社会人 4名)

薬学部以外の卒業生 1名(内社会人 1名)

在籍者数(平成29年5月1日現在): 14名

既退学者数: 0名

・平成29年度入学者

入学者数: 15名(定員 8名)

内訳:6年制薬学部卒業生 12名(内社会人 11名)

4年制薬学部卒業生 3名(内社会人 3名)

薬学部以外の卒業生 0名(内社会人 0名)

在籍者数(平成29年5月1日現在): 15名

既退学者数: 0名

○「理念とミッション」、「アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー」と実際に行われている教育との整合性

【理念と実際に行われている教育との整合性】

昭和大学大学院の理念は以下のとおりである。

「昭和大学大学院は、医学研究科、歯学研究科、薬学研究科、保健医療学研究科を擁する医系総合大学院であり、先端的研究を進め、高度な医療を担う人材を育成し、生命科学の進歩と文化の発展に貢献するために設立された。

社会がめまぐるしく変化する中で、医療の高度化や価値観の多様化に伴い、人類の健康・福祉の維持向上のために、より深く包括的な生命真理の探究が求められている。

本大学院は医系総合大学院の特長を活かし、疾病の解明と克服を目的とした先端かつ独創的な研究を推進し、知の創造に向けて邁進する。さらに、優れた研究・教育・指導能力、高度の専門性、倫理観、温かな人間性を身につけ、高い知性と豊かな感性をもって未知の分野に挑戦する医療人を育成する。このような研究や教育を通じて、国際的視野に立つ、社会に開かれた大学院として、人類の幸福に寄与することを使命とする」

その下で薬学研究科の理念は、「昭和大学大学院薬学研究科は、薬学に関する先端かつ独創的な研究を推進する研究者、高度な専門性を発揮する薬剤師、高い知性と感性をもち新たな分野に挑戦する教育者を養成することで、人類の幸福に寄与する」としている。

○自己点検・評価

上記のように4年制博士課程の理念とミッションは、薬学系人材養成の在り方に関する検討会の提言「医療の現場における臨床的な課題を対象とする研究領域

を中心とした高度な専門性や優れた研究能力を有する薬剤師などの養成に重点をおいた臨床薬学・医療薬学に関する教育研究を行う」に沿ったものであり、4年制博士課程の主たる目的に相応しいものとなっている。

本年3月までに本学研究科博士課程を修了し、博士（薬学）の学位を授与した9名の進路は、本学薬学部の病院薬剤学講座教育職員6名、がん研究会有明病院1名、国立がん研究センター東病院1名、東京都医学総合研究所1名である。以上の進路は、「薬学に関する先端的かつ独創的な研究を推進する研究者、高度な専門性を発揮する薬剤師、高い知性と感性をもち新たな分野に挑戦する教育者を養成する」という本研究科の理念を実現するものであり、理念と実際のアウトプットとの整合性がとれていると言える。

【アドミッションポリシーと実際に行われている教育との整合性】

本研究科のアドミッションポリシーは以下のとおりである。

1. 臨床現場の課題を高度な専門性や優れた研究能力で解決し、その成果を発信する薬剤師を目指す人
2. 疾病の解明と克服を目的とした先端的かつ独創的な研究を推進する研究者を目指す人
3. 医療・健康・生命科学の専門知識を深く追求し、行政や製薬企業など様々な分野で活躍する薬剤師を目指す人
4. 高度な専門性や優れた研究能力を有し、大学や医療現場で後進の指導に当たる教育者を目指す人

○自己点検・評価

本研究科のアドミッションポリシーに基づき、70名の入学者を受け入れてきた。平成29年5月現在在籍している大学院生57名の内訳は、6年制薬学部卒業生33名（内社会人28名）、4年制薬学部卒業生22名（内社会人22名）、薬学部以外の卒業生1名、外国の薬学部を卒業した者1名となっている。一般大学院生6名を除く社会人大大学院生51名は、病院勤務が39名、薬局勤務が6名、製薬企業勤務が5名、その他が1名で、臨床現場の課題解決を目指して入学する者が多数を占めている。平成24～26年度の入学者29名中4名が一身上の都合により退学したが、平成27年度以降の入学者41名から退学者は出ていない。このことは、入学志願者の本学薬学研究科に対する理解が深まり、アドミッションポリシーに基づいた適正な学生受入が定着してきたことが伺える。

【カリキュラムポリシーと実際に行われている教育との整合性】

本研究科のカリキュラムポリシーは以下のとおりである。

1. 生命科学の基盤に立った、薬学並びに関連諸分野に関する深い洞察力及び専門的知識の修得を通して、課題探求能力を備えた研究者ならびに高度な知識と技能を有する専門職業人を養成するための教育を行う。
2. 薬学研究科の教育は、講義、演習、実習および学位論文作成のための研究等に対する指導により行う。
3. 研究を実施していく上での基礎的な知識と技能を身につけるために、全研究科共通科目を開講する。
4. 専門分野及びその周辺にまたがる学識を幅広く涵養し、主科目以外の学問領

域への関心を拡げ学際的視点を養えるよう、薬学研究科科目を開講する。

5. より深い専門性を修得するために、専門薬剤師等の取得を支援するための専門科目を開講する。
6. 国際的に活躍できる研究者および薬剤師を養成するための英語教育を行う。国内外の学会・研究会等への参加を通して、幅広い視野の確立と、成果発信能力を獲得するための教育を行う。

○自己点検・評価

本研究科では、カリキュラムポリシーに基づいて教育課程を構築し、薬学研究科科目、全研究科共通科目、専門科目を開講している。博士課程の修了要件は、薬学研究科科目として薬学研究課題20単位と輪講4単位の取得、および薬学研究科科目と全研究科共通科目から6単位以上の取得で、合計30単位以上を社会人でも円滑に履修できるようカリキュラムを構成している。また、ネイティブスピーカーによる英語科目は必修科目として位置付けている。このように、本学薬学研究科で実施しているカリキュラムは、上記のカリキュラムポリシーに基づいた内容になっている。さらに平成29年度からは、社会的に注目度の高い分野について薬学研究科科目の新規科目として開講し、また研究倫理教育の推進を図るためCITI Japanのe-ラーニングプログラムの修了を義務付けた。このように社会のニーズや薬学の進歩に応じて開講科目の見直しを行っていることは評価できる。

【ディプロマポリシーと実際に行われている教育との整合性】

本研究科のディプロマポリシーは以下の通りである。

「博士の学位は、臨床的課題を中心とした薬学的に意義のある研究を実施し、博士論文をまとめる能力に対して認定される。学位取得には、所定の単位を取得し、研究成果を査読のある国際的学術誌に公表し、博士論文の審査に合格することが必要である。博士論文審査では、研究目的が明確であること、関連領域の情報を十分に学習していること、研究計画・方法が適切であること、研究結果が科学的に解析・評価されていること、論理的な考察が加えられていることなどが審査される」

なお、薬学部以外の卒業生に対しても全く同様の審査基準により審査を行う。

○自己点検・評価

本研究科のディプロマポリシーに則り、3年次の研究中間報告、4年次の論文発表会および論文審査を経て、9名に博士(薬学)の学位を授与した。学位を授与した9名の修了者の博士論文はすべて臨床的課題を中心とした薬学的に十分に意義のある研究が実施されており、学位の授与はディプロマポリシーに基づいて適切に実施されていると言える。また、大学院修了式においては、最も成績優秀な修了者1名に大学院薬学研究科上條賞を授与し、研究への取組を奨励していることは評価できる。

・「理念とミッション」、「アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー」と、実際に行われている教育との整合性について、4年制薬学部を基礎とした博士課程の教育課程との違いを明確にしつつ、自己点検・評価を行うこと

○ 入学者選抜の方法

受験資格の審査を通過したものに対して春季選抜Ⅰ期試験、春季選抜Ⅱ期試験および秋季選抜試験の年3回の入学試験を行なっている。なお、本学大学院では平成22年度より大学院秋季入学制度を実施しており、入学時期は春季と秋季の年2回である。

選抜は、受験資格を満たした対象者に対して英語の筆記試験と、専門科目の口頭試問を行い、総合的に合否を判定する。口頭試問では、志望の動機やこれまでの研究と今後の研究の方向性について試問を行う。英語の試験により、実際の研究に必要な情報収集と英語論文作成のための英語能力を測り、また、口頭試問ではその研究に対する姿勢を評価し、博士課程に進学するにふさわしい人材か審査を行う。

○自己点検・評価

平成24年度～平成29年度の入学者選抜の実施において、応募者は6年制薬学部を卒業した者、旧薬学教育課程の博士前期課程を修了して現在薬剤師として勤務している者、旧薬学教育課程の学部を卒業して薬剤師として勤務しながら研究を行っている者、薬学部以外を卒業して薬剤師と勤務しながら研究を行っている者、および外国の薬学部を卒業した者であった。旧薬学教育課程の学部を卒業した者、薬学部以外を卒業した者、および外国の薬学部を卒業した者については、希望する専攻科目の担当教員により試問が行われ、研究歴2年以上に相当する学力があるか、6年制薬学部卒業者と同等以上の学力があるか評価をうけ、受験資格有りとして認められた。

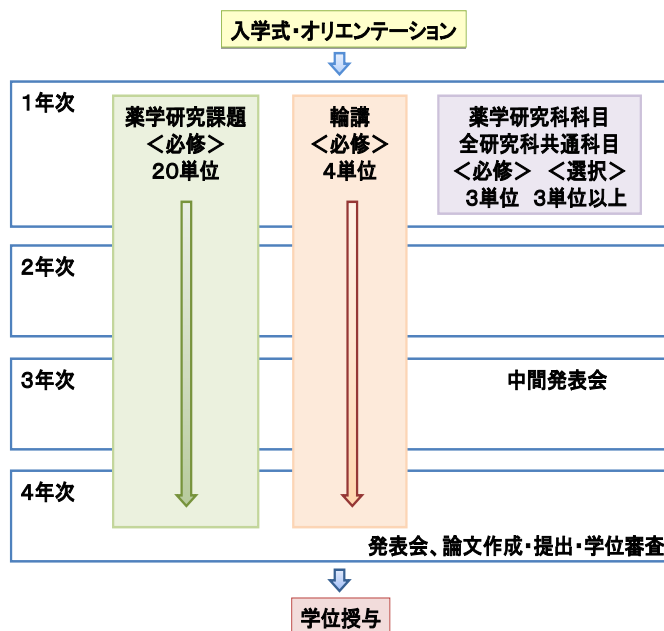
全ての受験者は、英語筆記試験と、専門科目について口頭試問を受けた。これらの試験結果を総合的に評価し、合否を判定した。

上記のような選抜方法で入学した学生において、これまでに大きな問題は認められず、現在の選抜方法は適切であると評価する。

○ カリキュラムの内容

カリキュラムは、薬学研究課題、輪講、講義科目から成り立っており、修得すべき必要単位数は30単位以上で、以下のように履修する。

薬学研究課題		20単位
輪講		4単位
講義科目	必修	3単位
	選択	3単位以上



「薬学研究課題および輪講」

臨床現場のニーズを深く理解して課題を抽出し、医療に直接フィードバックする研究を推進できる高度な専門性と優れた研究能力を身につけることを学習目標とする。所属する大学院講座・部門を主宰する教授あるいは准教授が担当となり、薬学研究課題の設定や研究の実施に関して必要な研究手法や技術などを教え、それらを用いて課題の解決に取り組み、論文として完成させるまでの具体的な手順を指導する。さらに、同講座・部門の准教授、講師、助教も研究・実験に関してセミナー形式で適宜助言し、技術的な指導や援助を行う。研究の仕方や課題への取り組み方、その際に用いる技術などを修得することで自ら研究が実行できる能力を獲得することを目的とする。この間、研究会や学会などにも参加し、国内外の研究者との討議なども経験する。

輪講はセミナー形式で行い、研究課題に関連した最新の報告や自分の研究成果を発表し、講座・部門の教員や学生、研究生などと討議する。輪講により研究内容について理解を深め、さらに高度な研究能力を身につけることを目指す。

4年間のこれらの教育により、学生は自立して研究を実施し、研究活動、学会発表、学術論文作成に励み、4年次にはその成果をまとめ学位論文を作成する。

「講義科目」

各講義科目の内容については、シラバスおよび別添1の教育課程等の概要に示しているが、研究に必要な基礎技術の習得や専攻分野にとどまらず広く学識を涵養で

きる科目群として「全研究科共通科目」および「薬学研究科科目」を用意している。さらに、薬剤師としての専門性を深めるための科目群として「がん専門薬剤師養成科目群」を提供している。これらの科目のうち、国内外に成果を発信する英語能力を身につけるための「Clinical and Research English」2単位と、臨床的課題を対象とする研究を推進するための基礎科目として「医学生物学における統計学的解析法」を必修としている。学生は自分の専攻する科目の指導教員から、研究課題や進路にふさわしい履修指導をうけ、自分の興味ある分野を加味してこれらの科目群から必要なものを履修しながら4年間薬学研究課題や輪講で研究能力の修得に努める。

まず、研究を推進するための基礎となる講義科目（必修・選択）を原則1年次に履修する。研究の過程で必要になったものについては随時どの学年でも履修が可能である。また、社会人大学院生も多いため、大学院設置基準第14条に定める教育方法の特例措置を実施し、講義科目は夕方6時以降や土曜日に開講し、4年間で無理なく履修できるよう対応している。

講義科目の構成は以下のとおりである。

1. 必修講義科目

（薬学研究科科目） Clinical and Research English 2単位

（全研究科共通科目） 医学生物学における統計学的解析法 1単位

2. 選択講義科目・・・以下より3単位以上必修

（薬学研究科科目）

薬剤開発の先端科学	1単位
疾患解明の先端科学	1単位
臨床研究概論	1単位
感染制御薬学	1単位
医薬品安全性学	1単位
生理・薬理学領域基礎研究の流れ	1単位
～研究立案から論文掲載までの流れを学ぶ～	
薬物治療学特論	1単位
個別化製剤概論	1単位
救急医療薬学	1単位
がん薬物療法学	1単位
薬学的がんケア学	1単位
がん疼痛緩和学	1単位

（全研究科共通科目）

生体の病理病態学的解析法	1単位
生体の組織構造解析法	1単位
生体の機能解析法	1単位
生体の物質分析法	1単位
分子生命科学的解析法	1単位
生体高分子の構造解析法	1単位
4大学院がんチーム医療	1単位

「Clinical and Research English」は、ネイティブスピーカーの講師による90分の講義・演習を隔週の土曜日に通年で20回受講する。但し、毎週開講しており、都合の悪い場合は別の週に受講することが可能である。

薬学研究科科目は夕方6時以降や土曜日に開講し、90分10回受講する。スケジュールに従い実施する他、科目履修希望者の都合が悪い場合は随時相談し、開講日時を変更することが可能である。

全研究科共通科目は、土曜日の午後に3時間5回、あるいは平日午後6時以降に3時間5回で、1年を4期に分けて各期に開講しており、各科目の1回の講義ごとに年8回の受講機会を確保することで社会人が受講しやすくしている。

専門薬剤師や認定薬剤師育成を主な目的として設定した「がん専門薬剤師養成科目群」のうち「薬学的がんケア学」については1～4年次の4年間で、「がん治療学」、「がん薬物療法学」、「がん疼痛緩和学」は2年次に取得することとしている。

上記の薬学研究課題、輪講、講義科目の履修状況については、履修登録書、受講票、履修報告書を用いて学生自身が管理し、また、年度毎にその状況を研究科運営委員会に提出することになっており、各学生の履修状況を把握し問題があれば速やかに対応できるように準備している。

○自己点検・評価

平成29年度の履修状況は、以下のとおりである。(科目等履修生含む)

必修科目: Clinical and Research English(履修者 20名)、医学生物学における統計学的解析法(履修者 20名)

薬学研究科科目(選択科目): 薬剤開発の先端科学(履修者4名)、疾患解明の先端科学(履修者6名)、がん薬物療法学(履修者5名)、がん疼痛緩和学(履修者3名)、臨床研究概論(履修者6名)、感染制御薬学(履修者5名)、救急医療学薬(履修者10名)、医薬品安全性学(履修者5名)、生理・薬理学領域基礎研究の流れ(履修者5名)、薬物治療学特論(履修者6名)、個別化製剤概論(履修者4名)

全研究科共通科目: 生体の病理病態学的解析法(履修者4名)、生体の機能解析法(履修者5名)、生体高分子の構造解析法(履修者3名)、4大学院がんチーム医療(履修者1名)

以上、科目群を設定することにより、バランスのとれた履修ができています。全大学院生に向けて授業アンケートを実施した結果、講義および研究に関して概ね良好な評価であった。平成29年度から新たに開講した科目を始め、全科目において授業評価を継続して実施し、内容の妥当性や適切性について改善・充実を実施していく必要がある。また今後もさらなる入学者の増加が見込まれることから、4年次の発表会の運営や講座間の研究指導体制の見直しについて検討する予定である。

- ・別途シラバス及び教育課程等の概要(別紙様式第2号)を添付すること
- ・履修モデルを添付すること
- ・電子シラバスのリンク先

<https://kyoumu.showa-u.ac.jp/syllabusgaku/Default.asp?nendo=2017>

- ・別添1: 教育課程等の概要(別紙様式第2号)
- ・別添2: 履修モデル

【教育課題等の概要】

(別添1)

別記様式第2号 (その2の1)

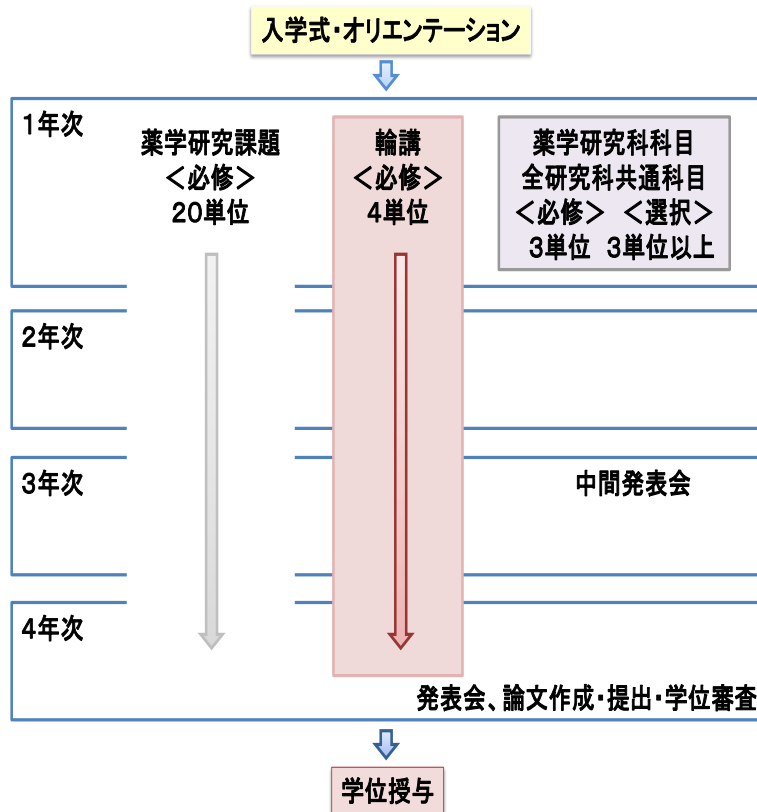
(用紙 日本工業規格A4縦型)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	
薬学研究科科目	薬剤開発の先端科学	1通		1			○		
	疾患解明の先端科学	1通		1		○			
	臨床研究概論	1通		1		○	○		
	感染制御薬学	1~4通		1		○	○		
	医薬品安全性学	1通		1		○			
	生理・薬理学領域基礎研究の流れ ~研究立案から論文掲載までの流れを学ぶ~	1通		1		○			
	薬物治療学特論	1通		1		○	○		
	個別化製剤概論	1通		1		○			
	Clinical and Research English	1通	2			○	○		
	救急医療薬学	1~4通		1		○	○		
	がん薬物療法学	1通		1		○			
	薬学的がんケア学	1~4通		1		○			
	がん疼痛緩和学	1~4通		1		○			
	小計 (13科目)		-	2	12	0	-		
全研究科共通科目	医学生物における統計学的解析法	1通	1				○		
	生体の病理病態学的解析法	1通		1			○		
	生体の組織構造解析法	1通		1			○		
	生体の機能解析法	1通		1			○		
	生体内の物質分析法	1通		1			○		
	分子生命科学的解析法	1通		1			○		
	生体高分子の構造解析法	1通		1			○		
	4大学院がんチーム医療	1通		1					
	小計 (8科目)		-	1	7	0	-		
専門科目	薬学研究課題								
	薬学教育学								
	薬化学								
	薬品製造化学								
	臨床分析化学								
	薬品物理化学								
	生物化学								
	腫瘍細胞生物学								
	毒物学								
	薬理学								
	生理・病態学	1~4通	20	0			○		
	薬剤学								
	薬物動態学								
	医薬情報解析学								
	感染制御薬学								
	薬物治療学								
	天然医薬治療学								
	医薬品評価薬学								
	地域医療薬学								
	衛生薬学								
	病院薬剤学								
小計 (1科目)		-	20	0	0	-			
専門科目	輪講								
	薬学教育学								
	薬化学								
	薬品製造化学								
	臨床分析化学								
	薬品物理化学								
	生物化学								
	腫瘍細胞生物学								
	毒物学								
	薬理学								
	生理・病態学	1~4通	4	0			○		
	薬剤学								
	薬物動態学								
	医薬情報解析学								
感染制御薬学									
薬物治療学									
天然医薬治療学									
医薬品評価薬学									
地域医療薬学									
衛生薬学									
病院薬剤学									
小計 (1科目)		-	4	0	0	-			
合計 (23科目)			-	27	18	0	-		
学位又は称号	薬学 (博士)			学位又は学科の分野			薬学関係		
卒業要件及び履修方法							授業期間等		
修了に必要な要件は、30単位以上(薬学研究課題20単位、輪講4単位、薬学研究科科目と全研究科共通科目の内必修科目3単位と選択科目3単位以上)の単位を修得し、かつ、研究上必要な指導を受けた上、博士論文の審査に合格することとする。							1学年の学期区分	2期	
							1学期の授業期間	15週	
							1時限の授業時間	90分	

①一般的な学生の場合

学生は入学時から志望する講座に所属する。入学式後にオリエンテーションを行い、そこで学生に科目や履修方法についての一般的な説明を行う。その後、学生は自分の所属する講座の指導教員から、研究課題や進路にふさわしい履修指導を受け、4年間薬学研究課題や輪講で研究能力の修得に努める。

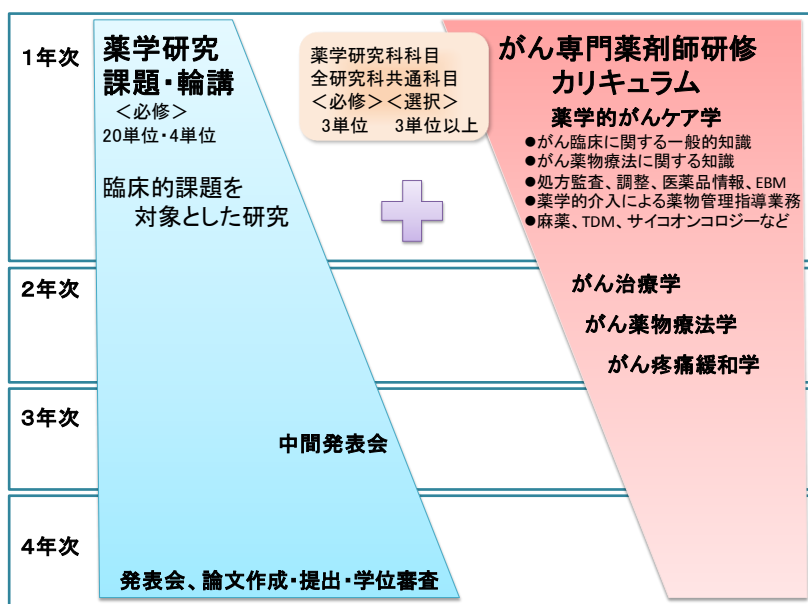
まず、指導教員の指導を受けながら自分の研究課題を設定する。設定後は4年間の大まかな研究スケジュールを組み立てる。1年次前期は研究課題に関する勉強や研究手法の修得に努め、その後研究を進める。必修科目は専攻分野や広く臨床的薬学研究に必要な基礎的素養を涵養することを目的としているため、原則研究科入学後1年間のうちに履修する。また、選択科目についても原則入学後1年間のうちに履修することを薦めるが、研究などの過程で必要となったものを2～4年次に受講することも可能とする。2年次には更に研究を進め、まず3年次に行う中間発表会を目指して研究をまとめる。中間発表会は公開で実施される学士会総会でのポスター発表あるいは所属する講座内で行われる。教員や学生、附属病院の職員などからの様々な視点からの質問やコメントをもらい、研究の完成を目指す。また、学会にも参加し、最新の情報を広く知り、他の研究者との質疑応答によりさらに課題を深く掘り下げ、最終的に博士論文の完成を目指す。完成させた研究について4年次の後期に公開で口頭発表し、その後、博士論文を完成させて提出する。論文審査を受け、研究科教授会での学位審査および最終試験に合格すれば学位が授与される。



②がん専門薬剤師を目指す学生の場合

がん専門薬剤師の資格申請に必要な講義や研修、症例蓄積のためのがん専門薬剤師養成科目群を提供するが、本学博士課程は臨床的課題を対象とする研究領域を中心とした高度な専門性や優れた研究能力を有する薬剤師等の養成に重点をおいた教育研究が目的であり、がん専門薬剤師を目指す学生であっても研究を実施、完成し、研究能力を修得して博士(薬学)を取得することが第一の目的である。従って、これらの学生は指導教員から指導を受け研究に励み、一般的な学生の場合と同様に薬学研究課題、輪講に励むとともに、以下のようにがん専門薬剤師養成科目群を履修していく。

指導教員との検討の結果、全ての科目の履修を考える場合は、下図のようなスケジュールで4年間を過ごすことになる。1年次に薬学的がんケア学を選択し、病棟活動を中心に高度な薬剤師業務とがんをはじめとする感染制御、緩和医療、オンコロジー・エマーゼンシーなどの専門領域についての講義や実技の研修を1年間に亘って行う。全て履修する場合1日3時間程度でおよそ40日間の講義や研修を1年間で受けることになる。但し、薬学的がんケア学が提供する全ての項目を履修する必要は無く、必要な項目を選択して履修する。また、薬学的がんケア学の中で行うがん専門薬剤師認定要件の1つである50症例以上の薬剤管理指導業務の症例の蓄積は1～4年次の4年間で行う。2年次にはがん領域に特化し、昭和大学病院において、がん薬物療法学、がん疼痛緩和学を履修する。更に日本医療薬学会が認定するがん領域の講習会および別に定める学会が主催するがん領域の講習会などに参加し、所定の単位の履修に努めることが認定申請資格を満たすには必要で、これらにも参加する。がん専門薬剤師の認定要件にはがん専門薬剤師研修施設での実務経験あるいは研修歴5年以上が必要とされるため、この科目群の履修者は、不足分を補完するために更にごがん専門薬剤師研修施設での実務経験あるいは研修が必要であるが、大学院修了後の学生の昭和大学病院薬剤部での研修の受け入れも行う予定である。



○ 全大学院生の研究テーマ

	研究テーマ名	研究の概要
1	外来化学療法における医療者-患者間を結ぶ情報共有システムの構築	IT 機器を利用した患者-医療者間の情報共有ツールを(開発・)利用することにより、副作用や薬歴等の情報を医療者が簡便に把握できるようになるツールを開発する。
2	乳癌高度催吐性化学療法における QOL と悪心嘔吐リスク因子に関する研究	高度催吐性化学療法を受ける乳癌患者を対象に、JSCO 制吐薬適正使用ガイドラインで推奨される制吐療法(アプレピタント、5HT3 受容体拮抗薬、デキサメタゾン併用)を行った場合の QOL の実態と、既知のリスク因子の QOL への影響を明らかにする。
3	バンコマイシン耐性腸球菌(VRE)感染症に関する研究	バンコマイシン耐性腸球菌(VRE)は敗血症や心内膜炎の起炎菌となりうる重要な院内感染菌の一つであり、一旦アウトブレイクするとそのコントロールには非常に大きな労力を要する。VRE 臨床分離株の特徴を解析するとともに、VRE 感染症に対する治療薬について比較検討する。
4	Cetuximab・Panitumumab 関連皮膚障害に対するビタミン K1 軟膏の有効性と安全性の評価	ビタミン K 軟膏は抗 EGFR 抗体による皮膚障害出現患者にビタミン K 軟膏とプラセボを盲検化し同一患者内で塗り分けを行い皮膚障害の改善効果について検討する。
5	カテーテルアブレーション施行時のペンタゾシンによる嘔気嘔吐の発現に関する検討	心房細動アブレーション施行時の鎮痛薬として、ペンタゾシンが用いられるが、術後の嘔気嘔吐が問題となっている。本研究は、アブレーション後の嘔気嘔吐の発現頻度を調査し、その対策を検討する。
6	日本人におけるインテグラーゼ阻害剤の治療効果に関する研究	本研究は、日本人におけるインテグラーゼ阻害剤の治療効果について確認することを最終目的とし、併せて薬剤師の HIV 診療への介入による有用性について検討する。
7	抗悪性腫瘍薬投与時における血管痛の発症頻度の解析と対策	オキサリプラチン、ゲムシタビン、ビンoreルビン、エピルビシンを投与された患者を対象に、電子カルテを利用して後方視的調査を行う。血管痛の発症頻度および発症に関連する因子(投与量、各種鎮痛薬併用の有無等)を統計学的に解析し、明らかにすることでその予防法および対処法を確立する。
8	発がんにおける細胞内ホスホリパーゼ A2 の機能の解析	発がんにおける細胞内ホスホリパーゼ A2 の機能を明らかにし、新たなバイオマーカーへとうなげることを目的とし、腫瘍組織における酵素の発現、遺伝子多型を解析するとともに、実験動物モデルを用いた検討を行う。
9	昭和大学病院における院内血流感染症の疫学調査	血流感染症の疫学データを調査し、治療や予後改善につなげる。

10	TKI の薬物間相互作用	TKI と患者の服用薬による有害事象に関する後ろ向き研究を行う。
11	レドックス変化と細胞の悪性化	活性酸素シグナルによる細胞増殖制御と癌化の関係を研究する。
12	Th17 サブセットの分化と病態に関する研究	炎症性 T 細胞 Th17 は様々な疾病の病態に関与しているが、その実態は不明な点が多い。我々の研究で Th17 には機能をこににするサブセットが存在し、その変化によって病態形成に影響がでると予測している。研究では、そのサブセット分化に影響を与える薬物について検討し、関連する疾病の治療の発展に貢献する。
13	種々の疾病、栄養障害における IL-411 に関する研究	IL-411 はフェニルアラニンを分解し、毒性のあるアンモニア、過酸化水素を発生させる酵素である。この分子に関しては不明な点が多くあるが、癌組織において多く発現され、免疫抑制に関与することが報告されており、癌末期の悪液質との関連性に興味をもたれた。研究では動物実験を用い、炎症、癌、老化といった疾病における IL-411 の役割を明らかにしていく。また、同酵素の阻害薬についても検討する。本研究により、悪液質や老化による筋力の減少に対する治療の開発に寄与することを目的としている。
14	服用性に影響を及ぼす薬剤と粘膜間トライボロジーの定量的評価	薬剤の服用性に関する2つの表面、すなわち薬剤表面とヒト口腔～食道粘膜表面間の付着力および動的摩擦力を定量的に評価することにより、服用性に優れた製剤の評価・開発に繋げる。
15	新規な服薬補助ソリューションの開発	嚥下困難者が服薬で使用するトロミ剤が薬剤の溶出に干渉し、薬効への影響が問題となっている。これを解決するため新規な服薬補助剤を開発し、服薬アドヒアランスの向上に繋げるソリューションを提供する。
16	アロマトーゼ阻害薬の副作用相談率の向上に向けて おくすり手帳副作用記録シートの活用と評価	アロマトーゼ阻害剤服用の乳がん患者を対象とし、独自開発したおくすり手帳副作用記録シートを活用し評価する前向きランダム化非盲検並行群間比較試験を行う。
17	機能性 PTP 包装の防湿性と取り出し易さに関する評価	PTP の防湿機能を高めるために、PTP 素材の厚さを厚くする、防湿性の高い素材を使用するなどの方法がある。本研究では、各種素材を用いた PTP 包装の防湿性および取り出し性の関係を明確にするため、調査を行う。
18	小児用ミニタブレットの院内製剤設計と受容性評価	小児が服薬に困難を抱えているとされる薬剤を用いて、院内製剤として直径 3mm の錠剤を製し、臨床における受容性を評価する。

19	増粘多糖類と薬剤の相互作用メカニズムの解明	嚥下補助とろみ剤と薬剤の相互作用が問題となっているが、その発生メカニズムを明らかにし、問題の広がりや影響について考察する。また、静電的相互作用を利用した苦味マスキング技術について、そのメカニズムを考察し、更なるマスキング効果の向上を検討する。
20	細胞シートを応用した新規な味センサーの開発	既存の人工脂質膜による味センサーでは、電気的に中性あるいは難溶性薬物の味は測定できない。本研究では味蓄細胞を発現させたセルシートを作製し、従来測定できなかった医薬品の味を定量的に測定する方法を開発する。
21	糖尿病合併症に関する新規治療方法の検討	糖尿病合併症の発症、増悪のメカニズム解明および新規治療ターゲットに関する薬理学的研究を行う。
22	新興デザイナードラッグの精神毒性に関する研究	危険ドラッグなどの新興デザイナーズドラッグの毒性は、多くの場合明らかにされていない。本研究では、これら薬物の乱用実態に即した精神毒性を明らかにし、乱用の危険性に関する基礎科学的情報を提供する。
23	急性薬物中毒患者の血中薬物動態解析によるナレッジ蓄積と救急治療への情報還元に関する研究	急性薬物中毒では、薬物血中濃度の情報が治療方針決定や予後予測に重要であるが、多くの中毒症例において検討されているとは言い難い。本研究は、薬物中毒症例の血中濃度推移の情報を蓄積集約し、救急治療へフィードバックすることを目的とする。
24	新興デザイナードラッグの吸入毒性に関する研究	危険ドラッグなどの新興デザイナーズドラッグの毒性は、多くの場合明らかにされていない。本研究では、これら薬物の多くが喫煙により乱用される実態に着目し、その吸入毒性を明らかにすることを目的とする。
25	新興デザイナードラッグの精神毒性の発現機構に関する研究	危険ドラッグなどの新興デザイナーズドラッグの毒性は、多くの場合明らかにされていない。本研究では、これら薬物の作用機構を明らかにすることを目的とする。
26	2型糖尿病における高インスリン血症の分子機構	2型糖尿病初期に認められる高インスリン血症は、糖尿病やアルツハイマー病のリスク要因であるが、高インスリン血症の分子機構の詳細は明らかになっていない。本研究は、非特異的カチオンチャンネルのTRPA1に着目し、病的インスリン分泌への関与を明らかにする。
27	分子標的薬とインターフェロン γ 併用効果の分子機構解析	インターフェロン γ はトラツズマブの抗腫瘍効果を増強する。本研究では、in vitro でその分子機構を明らかにすることにより、乳がん治療の新たなレジメン作成に向けた基礎的情報の提供を試みる。

28	寛ぎの香りの中枢神経作用の多様性について	アロマセラピーは、生活の場においてだけでなく、補完・代替療法の一つとして医療や、介護の現場で活用されつつあり、適正なアロマセラピーの使用は、患者や要介護者のQOLの向上につながることを期待される。本研究は、科学的根拠に基づいた補完代替医療としてのアロマセラピーの、より安全で効果のある正しい使い方の普及、および臨床への応用に大きく貢献すると考える。
29	Augmented renal clearance がメロペネムの母集団薬物動態モデルの予測性に与える影響の検討	集中治療領域では糸球体濾過量が $130 \text{ mL/min/1.73 m}^2$ (Augmented renal clearance ; ARC) を超えるような例が見受けられる。カルバペネム系広域抗菌薬のメロペネムは腎排泄型の薬剤であり、ARC はメロペネムの血中濃度の低下を引き起こすとの報告がある。抗菌薬治療の有効性の確保、耐性菌出現の観点からメロペネムの血中濃度を有効域に保つことは非常に重要である。現在、ARC の患者における投与量調節の方法は確立されておらず、Therapeutic drug monitoring (TDM)、持続投与、母集団薬物動態モデルの使用が検討されている。分析装置などを必要としない母集団薬物動態モデルの使用は多くの施設での活用が可能であり有用であると考え。今回は既に報告されているいくつかの母集団薬物動態モデルを使用し、どのモデルが ARC の患者の血中濃度予測に適しているか検討する。
30	新生ラット脳幹脊髄標本における呼吸リズム機構の解明	新生ラットの摘出脳幹—脊髄標本を用いて、呼吸性バースト形成および薬物誘発性の発作様バースト活動に対するリルゾールの影響を検討する。
31	残薬に係る処方せん様式変更と連携に関する診療所医師へのアンケート調査	診療所の医師を対象とした医師と薬剤師の残薬についての連携に係るアンケート調査を行う。
32	NHCAP における誤嚥性肺炎の抗菌薬治療抵抗性のリスク因子探索	NHCAP における誤嚥性肺炎の抗菌薬治療抵抗性のリスク因子を探索することによって、適正な抗菌薬使用につながる。

33	インターフェロンとLDV/SOFとのQOL比較	慢性C型肝炎の治療は疾病の根絶や死亡率の減少といった医療側の指標のみではなく、患者自身の主観による生活の質に配慮した医療が重要になってきている。また、年齢や性別、治療薬、治療効果などの因子の比率が患者QOLにどう影響されるかは不明である。そこで今回、肝炎治療における生活の質への侵襲範囲とリスクファクターを探り、適切な対応を検討する目的としてアンケートを行う。慢性肝炎で通院中の患者を対象とし、患者の主観によるQOL評価について調査し、統計解析・考察を行う。
34	便秘治療における薬剤師の関わり	便秘治療において薬剤師の関わりの現状を調査する。
35	川崎病におけるIVIG療法の反応性の検討	IVIG 反応性予測で用いる群馬スコアの有用性を検討し、現在の川崎病におけるIVIG 反応性のリスク要因を探索することを目的とする。
36	化学療法の予後と副作用の関係性	胃がんにおける標準治療であるS-1+CDDPによる好中球減少症の発症に関与する因子の検討を行う。
37	循環器疾患に対する抗凝固、抗血小板薬の有効性と副作用	後ろ向き調査によって循環器疾患において抗凝固薬、抗血小板薬における適正調査と、出血等の副作用発現のリスク因子を調査することで今後の薬物治療を明確化する。
38	フェンタニル貼付剤への早期切り替え因子の探索と吸収率に及ぼす皮膚乾燥の影響に関する検討	フェンタニル貼付剤の臨床的課題について、後方視的カルテ調査あるいは前向き臨床試験を行い、科学的エビデンスの構築を目指す。
39	抗がん剤市販後全例調査の意義と必要性の検討	新規抗がん剤の市販後に行われる全例調査の意義と必要性について科学的に検討することで、今後の全例調査の在り方を提案することを目的とする。
40	終末期医療における薬剤師の栄養療法への関わりに関する研究	終末期患者の予後と栄養療法の関係性について検討し、薬剤師の役割とその影響について科学的に検証する。
41	COPD および喘息患者における吸入療法への薬剤師介入が及ぼす影響の検討	薬局における積極的な薬剤師による介入による治療効果への影響を検討することで、患者のより良い吸入療法の実現を目指す。
42	ドセタキセル製剤間の副作用発現に関する比較検討	ドセタキセル製剤間の臨床的課題について、後方視的カルテ調査を実施して、副作用発現の違いについての科学的根拠を得ることを目的とする。
43	新規院内製剤プレガバリンクリームの開発	プレガバリンカプセルに関する臨床的課題について、院内製剤として新たな投与剤形を開発することで、患者のより良い疼痛治療を提案することを目的とする。

44	化学療法における新規 口内炎予防療法の検討	化学療法における口内炎予防薬についてのエビデンスは乏しいものが多いことから、エビデンスを構築するとともに新たな予防療法について提案することを目的とする。
45	薬剤師による注射薬混合における諸問題の検討	薬剤師業務における臨床的課題について、科学的根拠をもって検討し、エビデンスを構築することを目指す。
46	薬剤師業務における諸問題の検討	薬剤師業務における臨床的課題について、科学的根拠をもって検討し、エビデンスを構築することを目指す。
47	レゴラフェニブの薬物動態学 / 薬力学 (PK/PD) と遺伝子多型に関する検討	レゴラフェニブによる種々の副作用発現と薬物動態の関係性を明らかにするとともに、各種酵素や輸送担体の遺伝子多型との関連性を科学的に検討する。
48	低栄養高齢患者における抗菌薬の適正使用に関する検討	低栄養の高齢患者における抗菌薬の PK/PD について科学的に検討し、適正使用に向けた科学的エビデンスの構築を目指す。
49	酸化ストレスと脂質異常症の関係性	薬局や在宅でも測定できる酸化ストレス測定は、患者に対する生活指導に役立つ可能性がある。
50	がん細胞の抗がん薬耐性獲得の機序を探る	薬剤耐性の機序を解明することにより、新たな治療薬、治療法に役立つ可能性がある。
51	カテキン誘導体の抗アレルギー効果	新規抗アレルギー薬の開発に役立つ可能性がある。
52	酸化ストレスと DPP-4 阻害薬	新たな薬の選択につながる可能性がある。
53	抗がん薬による副作用と遺伝子多型	新たな投与方法に役立つ可能性がある。
54	在宅治療における重複投与を探る	現在問題となっている重複投与の解決につながる可能性がある。
55	漢方薬と抗酸化作用	新しい薬効につながる可能性がある。
56	臨床におけるジェネリック医薬品の評価	正しいジェネリック医薬品の評価を行う事によりさらなる普及につながる可能性がある。
57	検討中	地域医療薬学について、現在テーマ検討中

- ・在籍する全大学院生の研究テーマ名及び研究の概要を記載すること
- ・研究の概要については、テーマ設定の着想点、研究成果が薬剤師の実務など臨床に与える影響等を「アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー」との整合性を踏まえつつ、簡潔に記載すること

○ 医療機関・薬局等関連施設と連携した教育・研究体制

多くの研究が医療施設との共同研究であり、連携先の施設から直接指導を受けている。

- ・昭和大学病院にて、昭和大学病院における院内血流感染症の疫学調査を行い、データ収集について直接指導を受けている。
- ・横浜市立大学附属市民総合医療センター・東京医科大学病院乳腺科にて、乳癌高度催吐性化学療法におけるQOLと悪心嘔吐リスク因子に関する研究。横浜市立大学附属市民総合医療センター乳腺甲状腺外科 成井一隆 助教、橋本真也 薬剤部長、東京医科大学病院乳腺科 石川 孝 教授との共同研究を行っている。
- ・国立病院機構千葉医療センター薬剤部にてバンコマイシン耐性腸球菌(VRE)感染症に関する研究。加藤一郎 薬剤部長らとの共同研究を行っている。
- ・国立研究開発法人国立がん研究センター中央病院薬剤部にて、Cetuximab・Panitumumab関連皮膚障害に対するビタミンK1軟膏の有効性と安全性の評価。寺門浩之 薬剤部長らとの共同研究を行っている。
- ・横浜市立みなと赤十字病院薬剤部にて、カテーテルアブレーション施行時のペンタゾシンによる嘔気嘔吐の発現に関する検討。猪股克彦 薬剤部長らとの共同研究を行っている。
- ・国立研究開発法人国立国際医療研究センター病院薬剤部にて、日本人におけるインテグラゼ阻害剤の治療効果に関する研究。栗原 健 薬剤部長らとの共同研究を行っている。
- ・東京医科大学八王子医療センター薬剤部にて、抗悪性腫瘍薬投与時における血管痛の発症頻度の解析と対策。奥山 清 薬剤部長らとの共同研究を行っている。
- ・横浜市立みなと赤十字病院にて、NHCAPにおける誤嚥性肺炎の抗菌薬治療抵抗性のリスク因子探索を行っている。
- ・昭和大学病院にて、Augmented renal clearanceがメロペネムの母集団薬物動態モデルの予測性に与える影響の検討を行っている。
- ・日立総合病院にて、インターフェロンとLDV/SOFとのQOL比較を行っている。
- ・昭和大学病院にて、川崎病におけるIVIG療法の反応性の検討を行っている。
- ・昭和大学病院にて、化学療法の予後と副作用の関係性を研究している。
- ・新東京病院にて、循環器疾患に対する抗凝固、抗血小板薬の有効性と副作用を研究している。

- ・昭和大学藤が丘病院にて、フェンタニル貼付剤への早期切り替え因子の探索と吸収率に及ぼす皮膚乾燥の影響に関する検討。渡邊徹薬局長、腫瘍内科、消化器一般外科、消化器内科と共同研究を行っている。
- ・中延調剤薬局にて、COPDおよび喘息患者における吸入療法への薬剤師介入が及ぼす影響の検討を行っている。
- ・昭和大学病院にて、ドセタキセル製剤間の副作用発現に関する比較検討。腫瘍内科、乳腺外科と共同研究を行っている。
- ・昭和大学東病院および臨床薬理センターにて、新規院内製剤プレガバリンクリームの開発。糖尿病・代謝・内分泌内科学、臨床薬理学、臨床支援センターと共同研究を行っている。
- ・がん研有明病院にて、レゴラフェニブの薬物動態学/薬力学(PK/PD)と遺伝子多型に関する検討。若槻尊医師(消化器センター)と共同研究を行っている。
- ・平和堂薬局にて、漢方薬と抗酸化作用について研究を行っている。
- ・アップルケアネットにて、在宅治療における重複投与を探っている。

(注) 他職種との連携も含む

- ・ 研究テーマと関連づけて記載すること
- ・ 連携先の医療機関・薬局等関連施設側の指導体制も踏まえて記載すること

○ 学位審査体制・修了要件

審査体制

学位審査のために、研究科教授会は学位論文ごとに専門性を考慮して主査1名および副査2名を研究科教授会構成員より選出する。また、必要に応じ副査の数を増やし、本学研究科以外の教授およびそれに準ずる教員等を副査に加えることができる。なお、学位申請者の指導教員は、主査、副査に加わることはできない。

論文や口頭試問により博士論文の審査が行われ、審査の概要が研究科教授会に報告され、合否の最終判定が多数決で決定される。なお、ここで不合格になった場合には6か月ごとに再審査が行われる。

修了要件

博士課程4年間で30単位以上（薬学研究課題20単位、輪講4単位、薬学研究科科目と全研究科共通科目の内必修科目3単位と選択科目3単位以上）を修得し、かつ、研究上必要な指導を受けた上、博士論文の審査および最終試験に合格することが必要である。

必要な科目を履修し、指導教授が十分な研究成果を挙げたと判断した場合、学生は4年次の後期に公開で行う博士論文の口頭発表会で発表する。この発表の際の内容や質疑応答に対する研究科教授会委員やその他の薬学教員の予備的評価を踏まえ、その論文内容が十分に博士論文提出に該当すると指導教授が判断した場合に、学生は博士論文を作成・提出し、審査を申請できる。

○ 修了者の博士論文名、学術雑誌への掲載状況、進路状況

	博士論文名	学術雑誌への掲載状況			修了者の進路状況
		タイトル	雑誌名	暦年・掲載号・頁	
1	セフトリアキソンとカルシウム含有製剤との配合による不溶性微粒子生成に関する検討	Effect of Thiotriazinone Impurity on Insoluble Microparticles Generation Associated with Ceftriaxone-Calcium Salt Precipitation in Original (Rocephin®) and Japanese Generic Ceftriaxone Products	THE SHOWA UNIVERSITY JOURNAL OF MEDICAL SCIENCES	Vol.28 No.1 P.1-8 2016年	昭和大学薬学部病院薬剤学講座教育職員 6名 がん研究会有明病院 1名 国立がん研究センター東病院 1名

2	外来がん患者におけるオピオイドの服薬アドヒアランスに関する研究	<p>1. 緩和ケア病棟から自宅へ退院可能な患者の予測因子に関する後ろ向き研究</p> <p>2. 緩和ケア外来受診がん患者の抱える薬物療法の問題点と薬剤師の役割</p>	<p>日本緩和医療学会誌</p> <p>日本緩和医療薬学雑誌</p>	<p>第8巻 第1号 107-115頁 2013年</p> <p>第8巻 39-45頁 2015年</p>	公益財団法人東京都医学総合研究所 1名
3	ヒト間葉系幹細胞 (hMSC) の脂肪細胞分化におけるオランザピンの作用	Olanzapine promotes the accumulation of lipid droplets and the expression of multiple perilipins in human adipocytes.	Biochemical and Biophysical Research Communications	Vol.467 No.4 P.903-912 2015年	
4	非ウイルス性肝がん患者における Glutathione S-transferase 遺伝子多型と個人差に関する研究	Effect of the GSTM1 Null Genotype on Glutathione S-Transferase (GST) Activity in Patients with Non-Viral Liver Tumors	THE SHOWA UNIVERSITY JOURNAL OF MEDICAL SCIENCES	Vol.28 No.2 P.113-121 2016年	
5	ホスホリパーゼA2分子群を起点とした脂質代謝経路による大腸炎の制御	Group X phospholipase A ₂ releases ω3 polyunsaturated fatty acids to suppress colitis and promote sperm fertility	The Journal of Biological Chemistry	Vol.291 NO.13 P.6895-6911 2016年	

6	酸化ストレス感受性チャネルTRPM2はブレオマイシン誘発肺炎症の増悪に関与する	<p>1. Inhibitory effects of AG490 on H₂O₂-induced TRPM2-mediated Ca²⁺ entry.</p> <p>2. Sensitization of H₂O₂-induced TRPM2 activation and subsequent interleukin-8 (CXCL8) production by intracellular Fe(2+) in human monocytic U937 cells.</p> <p>3. TRPM2 channel in alveolar epithelial cells mediate bleomycin-induced lung inflammation</p>	<p>European journal of pharmacology.</p> <p>The International Journal of Biochemistry & Cell Biology</p> <p>Free Radical Biology and medicine</p>	<p>Vol.742 No.5 P.22-30 2014年</p> <p>Vol.68 P.119-127 2015年</p> <p>Vol.90 P.101-113 2016年</p>	
7	がん化学療法の有害事象に対する新たなエビデンスの構築	Antiemetic Effects of Granisetron or Metoclopramide Administered Prior to Amrubicin Monotherapy	Oncomedicine	Vol.2 P.24-27 2017年	
8	日本における医療経済性を考慮した抗がん薬治療選択に向けた研究～大腸がん術後補助化学療法のレジメン別費用最小化分析および認知機能低下の評価法確立について～	Cost-minimization analysis of adjuvant chemotherapy regimens given to patients with colorectal cancer in Japan	Journal of Pharmaceutical Health Care and Sciences	Vol.2 No.30 2016年 Open Access	

9	経口抗悪性腫瘍薬S-1投与患者における眼障害に関する検討	Incidence of ophthalmic disorders in patients treated with the antineoplastic agent S-1.	Japanese Journal of Cancer and Chemotherapy	in press	
---	------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------	----------	--

- ・既修了者の博士論文名、博士論文に関連する論文の学術雑誌(査読付きのもの)への掲載状況及び修了者の進路状況を記載すること

○ 社会人大学院生への対応状況

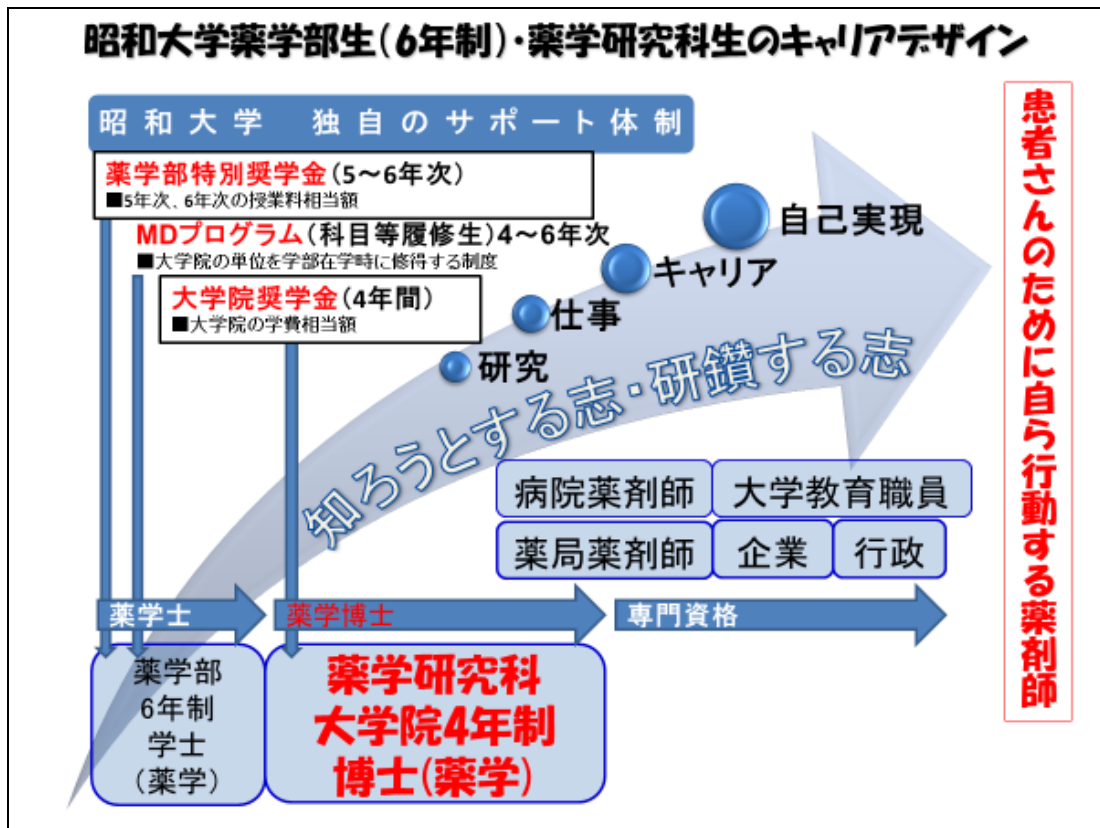
入学者選抜においては、社会人応募者と一般応募者への対応は同じである。入学後の履修においては、講義時間を平日夕方6時以降や土曜日に開講し、無理なく履修できるよう対応している。また、社会人が入学しやすいように秋季入学者も募集している。社会人入学者を含む全大学院生の学費相当額を奨学金として給付し、経済的負担をなくしている。

社会人入学者を含む全大学院生に向けて授業アンケートを実施している。その結果、講義および研究に関して概ね良好な評価であった。

- ・入学者選抜や入学後の履修における社会人への対応状況について、自己点検・評価(工夫や今後の課題を含む)を行うこと

○ 今後の充実・改善

大学院の定員は8名であるが、年々増加しており平成29年5月1日現在の1年生は18名（春季入学者15名、秋季入学者3名）で、4学年で合計57名が在籍している。大学院生の増加に伴い、臨床的課題を対象とした研究の推進、および指導的役割を担う薬剤師の養成が軌道に乗りつつある。大学院修了者には、自らの専門とする職域で指導的役割を担ってもらうことを期待している。学部を卒業し、大学院修了後の期待される進路と本学の支援体制を下図に示す。大学院進学が特別なことではなく、医学研究科や歯学研究科と同様、薬剤師としてのキャリアパスのメインルートとして定着することを目指す。そのためにこのキャリアデザインについて、学部の高学年生のみならず、低学年生および高校生にも紹介し、大学院進学に関する理解を深め、進学モチベーションを今後とも高めていく。



- ・自己点検・評価を踏まえ、大学院4年制博士課程の教育・研究における今後の充実・改善に向けた方策や課題を記載すること
- ・大学院生の在籍状況(定員充足の状況、修了・退学率等)や修了後の進路状況を踏まえた方策や課題についても記載すること